

孫策・周瑜の「断金」の交わりの歴史的背景 —孫氏と周氏・袁氏・朱氏

満田剛

はじめに

孫堅は董卓討伐に向かうとき（西暦190年頃）に家族を舒に移し¹⁾、その際に周瑜が（周家の）大邸宅を孫策の家族に提供して住まわせた²⁾。また、異説によると、朱儁とともに黄巾の乱を戦う際に家族を寿春に住まわせていたが、そこに孫策の評判を聞いた周瑜がやってきて同じ年齢の孫策と「断金の交わり」を結び、舒に移り住むことを勧め、孫策はそれに従ったとされている³⁾。どちらの説をとるにせよ、このことが孫氏政権の初期の重要なポイントの一つであるのは疑いないところである。

-
- 1) 陳寿『三国志』卷四十六孫討逆（孫策）伝（以下、陳寿『三国志』からの引用では書名・卷数を省き、紀伝名に「」を附することとする）には
堅初興義兵，策將母徙居舒，與周瑜相友，收合士大夫，江、淮間人咸向之。
とあり、「周瑜伝」には
初，孫堅興義兵討董卓，徙家於舒。
とある。
- 2) 「周瑜伝」には
堅子策與瑜同年，獨相友善，瑜推道南大宅以舍策，升堂拜母，有無通共。
とある。
- 3) 「孫討逆（孫策）伝」裴松之注（以下、「裴注」と略す）所引『江表伝』には
堅爲朱儁所表，爲佐軍，留家著壽春。策年十餘歲，已交結知名，聲譽發聞。有周瑜者，與策同年，亦英達夙成，聞策聲聞，自舒來造焉。便推結分好，義同斷金，勸策徙居舒，策從之。
とある。

(32)

しかし、呉郡富春の地方豪族の孫氏と後漢時代の揚州の名門・周氏が、どのようにしてこのような親密な関係を結ぶことができたのかという点については、先行研究の諸氏の見解もあるが、まだまだ考察の余地が残されていると考えられる⁴⁾。ここでは、廬江周氏と孫氏に加えて、汝南袁氏⁵⁾や朱儁⁶⁾を交えた関係性について考察し、その上で孫策と周瑜の関係の歴史的背景について考えてみたい。

周氏と袁氏、朱氏、そして孫氏

後漢後期の周瑜の一族については『後漢書』周榮伝に記述がある。それによると、周瑜の一族からは三公の一つである太尉になった人物が二人（周瑜の従祖

-
- 4) たとえば渡邊義浩氏は、周瑜が「孫堅の漢室復興への強い意志に共感したのであろう」とされていることに加え、「揚州に名声を有する周氏としては、郷里における規制力を維持するためにも、武力を持つ孫氏と結合するのは有利なことであろう」と述べ、孫策と周瑜の「友情」は「漢室匡輔」という基本的理念に加えて、こうした利害関係の一致にも裏打ちされていたのである」と述べられている（渡邊義浩「孫呉政権の形成」（以下、「渡邊義浩前掲論文」と略す）（『大東文化大学漢学会誌』38 1999年、『三国政権の構造と「名士』」（以下、「渡邊義浩前掲書」と略す）（汲古書院 2004年）第三章第一節229頁参照）が、主に孫策と周瑜の個人的な人間関係や周氏と孫氏の関係のみに注目したものであるように思われ、周瑜以前の廬江周氏と孫堅との関係については特に触れられていない。
 - 5) 汝南袁氏に関する研究としては、大久保靖「漢末門生・故吏考—汝南袁氏の場合—」（『史友』14 1982年）、山崎光洋「後漢時代の汝南の袁氏について」（『立正史学』53 1983年）などが挙げられる。
 - 6) 朱儁については、『後漢書』朱儁伝とともに、狩野直禎「後漢書列伝六十一朱儁伝訳稿」（『史窓』58 2001年）などを参照。

父・周景⁷⁾とその子・周忠)も出ている後漢時代における第一級の名門の出身である。周瑜は、おそらく孫氏政権に仕えた人物の中でも、最上級の名門であっただろう。

まず、周氏と孫堅との関係であるが、先述したように、黄巾の乱の際、もしくは董卓討伐に向かう際に、周瑜は(周家の)邸宅を孫策の家族に提供して住ませたとされる。しかし、この頃の周瑜も孫策も10歳、もしくは15歳前後だったということを考えると、これは周瑜一人の判断ではなく、「(この時点で親密な関係にあった)周氏が孫氏に邸宅を提供した」ということだろう。そして、この頃の周氏の中心は192年に太尉となる周忠であったと考えられる。この周氏と孫氏の関係は、孫策と周瑜の友情だけではなく、一族同士の利害関係が背景にあっ

7) 『後漢書』橋玄伝(『後漢書』も巻数は省くこととする)には

時豫州刺史周景行部到梁國，玄謁景，因伏地言陳相羊昌罪惡，乞爲部陳從事，窮案其姦。景壯玄意，署而遣之。玄到，悉收昌賓客，具考臧罪。昌素爲大將軍梁冀所厚，冀爲馳檄救之。景承旨召玄，玄還檄不發，案之益急。昌坐檻車徵，玄由是著名。

とあり、これによると、周景は曹操とも深いつながりがある橋玄と関係がある(石井仁『曹操—魏の武帝』(以下、「石井仁前掲書」と略す)(新人物往来社 2000年、文庫版 2010年)参照)上に、『後漢書』周榮伝附周景伝によると、

景字仲鬻。辟大將軍梁冀府，稍遷豫州刺史、河内太守。

とあって、当時の外戚の梁冀に辟された故吏であったとされる。また、「周瑜伝」裴注所引謝承『後漢書』には

景字仲鬻，少以廉能見稱，以明學察孝廉，辟公府。後爲豫州刺史，辟汝南陳蕃爲別駕，潁川李膺、荀緄、杜密、沛國朱寓爲從事，皆天下英俊之士也。稍遷至尚書令，遂登太尉。

とあり、周景が予州刺史だった際に、党錮の禁で弾圧されて亡くなる陳蕃・李膺や荀彧の父・荀緄を辟しているなど、興味深い経歴を持っている。また、『後漢書』周榮伝附周景伝には

是時宦官任人及子弟充塞列位。景初視事，與太尉楊秉舉奏諸姦猾，自將軍牧守以下，免者五十餘人。遂連及中常侍防東(郷?)侯(候?)覽、東武陽侯具瑗，皆坐黜。朝廷莫不稱之。

とあり、これによると、周景は宦官が任命したか、宦官の子弟であった將軍から太守までの高官50人ほどを挙げて免官に追い込んだりしているが、これは後漢の清流派からは高評価を受ける「業績」である。

(34)

たことは充分想定される。それについて考える際に、廬江周氏や孫堅と汝南袁氏、会稽の朱儁らの関係についておさえておきたい。

廬江周氏の基盤を築いたとされる周瑜の高祖父・周榮は、袁紹・袁術の高祖父である汝南袁氏の袁安が司徒だった時に部下として辟されており⁸⁾、周榮は袁安の故吏だということになる。この時代では、「元部下」を意味する「故吏」が招いてくれた人物（辟主）に対して抱く恩義は職務上の上下関係がなくなっても続き、故吏が辟主に対して尽くす忠節は辟主の子孫にも受け継がれると考えられた⁹⁾。このことから、少なくとも周瑜の4代前の周榮の時代から周氏と袁紹・袁術の一族の袁氏との間には密接な関係があったことがわかる。そのような関係を踏まえれば、(歴史書『三国志』でははっきりとは書かれないが)「周瑜が(おそらくは)揚州にやってきた袁術に仕えていた」と見られるのも不自然ではないということになる。

次に朱儁について見ていきたい。朱儁自身は名門でもなく、貧しい中から軍功を挙げて出世してきた人物である¹⁰⁾。178年に交阯刺史となり、反乱を平定したが、(後述するように)その際に交阯において勢力を拡大した可能性が高い。

8) 『後漢書』周榮伝には

周榮字平孫，廬江舒人也。肅宗時，舉明經，辟司徒袁安府。

とある。

9) 漢代の故吏に関する研究として、ここでは鎌田重雄「漢代の門生・故吏」(『東方学』7 1953年、のち『秦漢政治制度の研究』(日本学術振興会 1962年)所収)、五井直弘「後漢時代の官吏登用制「辟召」について」(『歴史学研究』178 1954年、のち『漢代の豪族社会と国家』(名著刊行会 2001年)所収)、矢野主税「漢魏の辟召制研究—故吏問題の再検討によせて—」(『長大史学』4 1959年)、永田英正「漢代の選挙制度と官僚階級」(『東洋学報』41 1970年)、西川利文「後漢の官吏登用法に関する二・三の問題」(『仏教大学大学院研究紀要』15 1987年)、福井重雅「後漢の辟召制度—その有資格者をめぐって」(『史観』117 1987年)・『漢代官吏登用制度の研究』(創文社 1988年)、西川利文「漢代辟召制の確立」(『鷹陵史学』15 1989年)、東晋次「後漢時代の故吏と故民」(『中国中世史研究』続編(京都大学学術出版会 1995年))を挙げておくこととする。

10) 『後漢書』朱儁伝参照。

その後、朱儁は皇甫嵩とともに黄巾の乱において活躍するが、その際に朱儁自身が上表して配下の佐軍司馬としてともに戦い、活躍したのが孫策の父・孫堅である¹¹⁾。会稽郡上虞出身の朱儁が呉郡富春出身の孫堅を引き連れていたことについては、前漢でこれらの郡が合わせて呉郡、のちに会稽郡とされていたことからすれば、郷里に近い者ということもあって登用したのかもしれない¹²⁾。

さらに、南陽の黄巾勢力と戦う際に、朱儁は河間郡出身の張超と行動をともにしている¹³⁾が、後にその張超が朱儁に対して推薦したのが汝南袁氏の一人・

11) 「孫破虜（孫堅）伝」には

中平元年、黄巾賊帥張角起于魏郡，託有神靈，遣八使以善道教化天下，而潛相連結，自稱黃天泰平。……漢遣車騎將軍皇甫嵩、中郎將朱儁將兵討擊之。儁表請堅爲佐軍司馬，郷里少年隨在下邳者皆願從。堅又募諸商旅及淮、泗精兵，合千許人，與儁并力奮擊，所向無前。汝、潁賊困迫，走保宛城。堅身當一面，登城先入，衆乃蟻附，遂大破之。儁具以狀聞上，拜堅別部司馬。

とある。

12) 『漢書』卷二十八地理志第八上・会稽郡、『統漢書』志第二十二郡国第八・揚州会稽郡参照。

13) 『後漢書』朱儁伝には

賊餘帥韓忠復據宛拒儁。儁兵少不敵，乃張圍結壘，起土山以臨城内，因鳴鼓攻其西南，賊悉衆赴之。儁自將精卒五千，掩其東北，乘城而入。忠乃退保小城，惶懼乞降。司馬張超及徐璆、秦頡皆欲聽之。

とある。

(36)

袁遺である¹⁴⁾。この袁遺は袁紹・袁術の従兄¹⁵⁾とされ、のちに袁紹と袁術の対立の中では袁紹派として動いたとされる人物である¹⁶⁾。

董卓が政権を握ると、宿将であった朱儁を董卓は表面上大事にしていたが、内心では嫌がっていた。そんな朱儁は董卓の長安遷都にもおおっぴらに反対したとされる¹⁷⁾。

董卓が長安に移ると、河南尹であった朱儁は洛陽を任されたが、山東の諸将(おそらくは袁紹ら)と内応し、董卓から襲われることを恐れて洛陽から荊州(袁

14) 「武帝紀」裴注所引『張超集』には

遺字伯業，紹從兄。爲長安令。河間張超嘗薦遺于太尉朱儁，稱遺「有冠世之懿，幹時之量。其忠允亮直，固天所縱；若乃包羅載籍，管綜百氏，登高能賦，親物知名，求之今日，邈焉靡儔。」事在超集。

とある。この『張超集』では、張超が袁遺を推薦した相手が「太尉朱儁」となっているが、この裴注が附されている反董卓への挙兵(190年)に関する本文では「山陽太守袁遺」とある。その上に、上記の『張超集』の文から、朱儁に推薦される前の時点で長安令になっていると考えられることや、朱儁が太尉となったのは193年であることから、184年から189年までの間に推薦されたのではないかと考えられる。また、「武帝紀」裴注所引『典論』には

太祖稱「長大而能勤學者，惟吾與袁伯業耳。」語在文帝典論。

とあり、これによると、曹操は袁遺をほめたたえていたとされるので、袁遺と曹操の関係はそれなりに良かったものと見られる。

15) 「武帝紀」裴注所引『張超集』、「何夔伝」参照。

16) 石井仁「孫呉政権の成立をめぐる諸問題」〔以下、「石井前掲論文」と略す〕(『東北大東洋史論集』6 1995年)参照。

17) 『後漢書』朱儁伝には

時董卓擅政，以儁宿將，外甚親納而心實忌之。及關東兵盛，卓懼，數請公卿會議，徙都長安，儁輒止之。卓雖惡儁異己，然貪其名重，乃表遷太僕，以爲己副。使者拜，儁辭不肯受。因曰：「國家西遷，必孤天下之望，以成山東之釁，臣不見其可也。」使者詰曰：「召君受拜而君拒之，不問從事而君陳之，其故何也？」儁曰：「副相國，非臣所堪也；遷都計，非事所急也。辭所不堪，言所非急，臣之宜也。」使者曰：「遷都之事，不聞其計，就有未露，何所承受？」儁曰：「相國董卓具爲臣說，所以知耳。」使人不能屈，由是止不爲副。

とある。

術?)へ逃れた¹⁸⁾。

袁紹・袁術らの反董卓連合軍が混乱する中で、191年4月に陶謙が中心となって朱儁を担ぎあげて第二の反董卓連合軍を結成したが、朱儁と周瑜の一族の周忠が董卓軍の李傕に中卒で敗れて¹⁹⁾一旦空中分解する(192年1月)。しかし、朱儁は中卒に駐屯し続けた。

その後、陶謙とともに朱儁の幕府に対して連名で獻帝を迎えようと述べた者たちの中に、沛国相・袁忠がいた。この袁忠も汝南袁氏の一員である²⁰⁾。この袁忠はその後会稽郡上虞に逃亡するが、この時の会稽太守の王朗は陶謙の故吏で

18) 『後漢書』朱儁伝には

卓後入關，留儁守洛陽，而儁與山東諸將通謀爲內應。既而懼爲卓所襲，乃弃官奔荊州。

としか書かれておらず、狩野直禎「後漢書列伝六十一朱儁伝訳稿」では、「荊州」を劉表としている。確かに、劉表は190年に荊州刺史として赴任しているが、荊州北部の南陽は袁術が握っていたと考えられることから、洛陽から逃げて行った先の「荊州」と考えれば、袁術の可能性が高いであろう。この時期の劉表の動向については、拙稿「劉表政権について—漢魏交替期の荊州と揚州」(『創価大学人文論集』20 2008年)も参照されたい。

19) 『後漢書』周榮伝附周忠伝注所引『吳書』には

忠字嘉謀，與朱儁共敗李傕於曹陽也。

とあり、これによると、周忠は朱儁とともに曹陽で李傕と戦って敗れたとされる(『後漢書』朱儁伝によると、朱儁は曹陽で李傕と戦っておらず、192年に袁紹・曹操らと異なる反董卓同盟を作り、中卒で戦って敗れていることからすれば、「曹陽」は「中卒」の誤りか?)。また、『後漢書』周榮伝附周忠伝本文には、

忠字暉，前爲洛陽令，去官歸。兄弟好賓客，雄江淮間，出入從車常百餘乘。及帝崩，暉聞京師不安，來候忠，董卓聞而惡之，使兵劫殺其兄弟。

とあり、周忠の子・周暉は董卓に殺されているが、このことにも注意が必要かもしれない。ちなみに、「周瑜伝」によると、周瑜の父・周異も洛陽令だったことがある。

20) 『後漢書』袁安伝附袁忠伝には

忠字正甫，與同郡范滂爲友，俱證黨事得釋，語在滂傳。初平中，爲沛相，乘輦車到官，以清亮稱。及天下大亂，忠弃官客會稽上虞。一見太守王朗徒從整飾，心嫌之，遂稱病自絶。後孫策破會稽，忠等浮海南投交阯。獻帝都許，徵爲衛尉，未到，卒。

とある。

(38)

あり²¹⁾、会稽郡上虞県は朱儁の出身地である。ということは、袁忠は朱儁・陶謙の勢力下に逃げ込んだことになる。

さらに、192年末の時点で陶謙は袁紹と対立した袁術から援護を求められた公孫瓚の要請を受けて出撃している²²⁾。このことからすれば、朱儁を担ぎあげた陶謙と袁術・公孫瓚は対袁紹という目的から何かしらの連携があった可能性がある。

また、陶謙に担がれた朱儁を説得して李傕らが支配する都・長安に招きいれようとしたのも（あの賈詡と共謀した）周忠であった²³⁾。

このように見ると、朱儁と袁遺・袁忠などとのつながりから、朱儁が汝南袁氏との間に重要な関係を持っていたことがわかる。さらに、洛陽から逃れた行き先の「荊州」が袁術のことであれば、朱儁が袁術とも連携していたことになる。

加えて、朱儁と周忠の動きを見ると、朱儁が周忠を中心としていたであろう廬江周氏とも深い関係を持っていたと考えられる。さらに、黄巾の乱での動向から、朱儁と孫堅にも関係があったことは間違いない。

ちなみに、周氏は廬江郡舒、朱儁は会稽郡上虞、孫堅は呉郡富春の出身であり、周氏と朱氏、孫氏の共通項は「揚州出身」ということになる。しかも、193年以降、袁術も揚州を拠点とすることになる。これは全くの偶然ではないだろう。

さらに、孫堅と袁術の関係を考えてみたい。董卓が政権を握り、袁紹を中心とした反董卓同盟ができた際に長沙太守だった孫堅が挙兵して、荊州刺史の王叡、南陽太守の張咨²⁴⁾を殺して北上し、魯陽で袁術と会見した。これがこの二人のはじめての会見とされる。袁術は上表し、孫堅を破虜將軍・予州刺史とし、

21) 『後漢書』袁安伝附袁忠伝参照。また、「王朗伝」には
徐州刺史陶謙察朗茂才。

とある。

22) 「武帝紀」参照。

23) これは、李傕らに対抗することを狙った動きであろう。

24) この張咨は、潁川の「知名」の士で（「孫破虜（孫堅）伝」裴注所引『英雄記』）、董卓のもとで伍瓊・周瑟・鄭泰・何顛らが地方官に任命した、もとの京官の一人であり、袁術は彼を頼って南陽にやってきたという見方もある（『後漢書』董卓伝、「董卓伝」、「許靖伝」、于濤〔著〕『三国前伝—漢末群雄天子夢』（中華書局 2006年）〔邦訳は、鈴木博〔訳〕『実録三国志』（青土社 2008年）〕参照。

実質的には配下としているが、この袁術と孫堅の会見に関する史書での記述からは、二人の関係が突然成立したような印象を受ける。

加えて、袁術と孫堅の仲を割くものがおり、袁術が孫堅に兵糧を送らなくなると、孫堅自身が袁術に談判をし、「私は国家のために賊を討伐し、袁氏一族の仇を奉じようとしているのに、あなたは私を疑うのですか」といったとされていることから、「孫堅が経済的に袁術に頼る」という二人の力関係がわかる²⁵⁾。この関係はその後も長く続き、孫策は袁術・劉繇の後継者と定義できるほどである²⁶⁾。

このように、豪族と見られるとはいえあくまでも郡レベルの孫堅と「四世三公」の袁術がいきなり何の前提もなく会見とは不自然ではないだろうか。この二人をつないだ誰かがいたと考える方が自然である。

ここまで述べたことを踏まえて考えると、まず周氏と孫堅をつないだ人物（の少なくとも一人）が朱儁だった可能性が高い。また、周氏・朱儁と袁氏の関係から、周氏や朱儁（特に周氏）を仲立ちとして孫堅と袁術との関係ができた可能性が十分に考えられる。ただ、袁術は後漢末の群雄で最初に皇帝を称した人物であるため、『三国志』・『後漢書』などの史書においても低い扱いを受けており、史料での記述も少ないと見られる。そのため、孫堅と周氏・袁術の間を取り持った人物の想定については、現時点では推測の域を出ない²⁷⁾。

このように見ると、孫策と周瑜の関係は孫氏と周氏の関係だけからいきなり始まったのではなく、後漢の中央政界や揚州出身の有力者を巻き込んだもので

25) 「孫破虜（孫堅）伝」には

是時、或問堅於術、術懷疑、不運軍糧。陽人去魯陽百餘里、堅夜馳見術、畫地計校、曰：「所以出身不顧、上爲國家討賊、下慰將軍家門之私讎。堅與卓非有骨肉之怨也、而將軍受譖潤之言、還相嫌疑！」術蹶踏、即調發軍糧。堅還屯。

とある。

26) 孫堅・孫策を含む孫氏政権と袁術との関係については、石井前掲論文、渡邊義浩前掲論文、渡邊義浩前掲書第三章第一節218～228頁、石井仁前掲書などを参照。

27) 拙著『三国志—正史と小説の狭間』〔以下、「拙著」と略す〕（白帝社 2006年・2009年）126～127頁参照。

(40)

あったことは確実である。その中で孫堅が周氏や袁術と関係を持つことができた要因は、先行研究でも述べられている通り、彼の軍事的実績であった²⁸⁾。

それ故であろうか、191年末に孫堅が劉表との戦いの中で戦死すると、孫堅の集団は瓦解して袁術に吸収されただけでなく、孫策も周瑜のもとを離れ、江都、そして孫策を忌み嫌う陶謙を避けて曲阿へと移っている²⁹⁾。これを見ると、孫堅と周氏の関係はやはりあくまでも孫堅の軍事力が前提とされていたものようであり、少なくとも孫堅の死去直後の孫策と周瑜の関係は、(精神的なつながりはともかく)行動を通して見ると「断金」とまでは決して言えないものであったと考えられる³⁰⁾。

194年、孫策は揚州に移ってきた袁術のもとに身を寄せ、その庇護を受けながら成長し、袁術の「将」・「部曲」として行動することになる。その才能によって袁術配下の張勳らから心を寄せられ、袁術本人も期待をしていた。その孫策の活躍によって、袁術は陸康や劉繇・王朗らを倒し、江淮・江東地方を制圧する。江東制圧の際に、孫策が手紙で歴陽にやって来たことを知らせると、周瑜が駆けつけて孫策を喜ばせているが、劉繇を破った後、孫策は周瑜に戻って丹楊を鎮めてほしいと依頼したにもかかわらず、丹楊太守だった周瑜の従父・周尚に代わって袁術から袁胤が派遣されてくると、周尚とともに周瑜は袁術の拠

28) 例えば、渡邊義浩前掲論文、渡邊義浩前掲書第三章第一節239頁参照。

29) 「孫破虜(孫堅)伝」には

初平三年、術使堅征荊州、擊劉表。表遣黃祖逆於樊、鄧之間。堅擊破之、追渡漢水、遂圍襄陽、單馬行峴山、爲祖軍士所射殺。兄子贲、帥將士衆就術、術復表贲爲豫州刺史。

とあり、「孫討逆(孫策)伝」には

堅薨、還葬曲阿。已乃渡江居江都。徐州牧陶謙深忌策。策舅吳景、時爲丹楊太守、策乃載母徙曲阿、與呂範、孫河俱就景、因緣召募得數百人。

とある。

30) ここまで述べたことを踏まえると、「孫討逆(孫策)伝」裴注所引『江表伝』の信頼性が問われることになる。『江表伝』は西晋の虞溥が著した五巻の書籍で、著者が洛陽で亡くなり、子の虞勃が東晋の元帝に献上していることから、少なくとも311年以前に完成したものと見られる(『晋書』虞溥伝、『隋書』経籍志など参照)。なお、『江表伝』については、現在輯本を作成中であり、稿を改めて述べたい。

点・寿春に戻っている³¹⁾。周瑜自身の考えはともかく、少なくとも行動から見ると、この時点の周瑜は孫策からの依頼よりも袁術の命令を重視し、袁術の配下としての行動をしていることになる。

ちなみに、194年頃には予章太守として朱儁の子の朱皓がおり、加えてこの頃に朱符（朱儁の子）が交州刺史となっていた。ということは、190年代半ばにはこの地方に朱氏の勢力が及んでいたことがわかる。そして、孫策の江東進出と朱儁の死は同年（195年）であり、その後孫策が劉繇を攻め、そのあおりで朱皓も殺され、196年頃には朱符も夷賊によって殺されている。このように見ると、朱氏の勢力は孫策の圧迫を受けて後退したと考えられる。また、朱符の死の直後に士燮が三人の弟を太守としていることから、朱符の死に士燮が絡んでいる可能性がある³²⁾。

その後、197年に袁術が皇帝を名乗り、孫策と袁術の関係が悪化したため、後漢を支えようとする価値観を大事にしていたと見られる周瑜も袁術のもとを離れ、198年以降、孫策とともに行動することになる³³⁾。

皇帝を名乗った後の袁術は衰退の一途をたどる。先に述べたように、史籍での袁術に対する評価は厳しいが、その理由は、これも先述のように有力な群雄の中で誰よりも早く皇帝になろうとしたという、ある意味で損な役回りを担っ

31) 「周瑜伝」参照。周氏の中で、袁術を支えた人物が周尚ということになるだろうか。

32) 孫策進出以前の揚州や交州に朱氏（朱皓・朱符）が力を伸ばしていたと見られることについては、『後漢書』朱儁伝に

子皓，亦有才行，官至豫章太守。

とあり、「士燮伝」にも

交州刺史朱符爲夷賊所殺，州郡擾亂。

とあることに加え、尾崎康「後漢の交趾刺史について—士燮をめぐる諸勢力—」（『史学』33—3・4 1961年）、拙著77, 105, 123頁などを参照。

33) 「孫討逆（孫策）伝」には

時袁術僭號，策以書責而絶之。

とあり、「周瑜伝」には

術欲以瑜爲將，瑜觀術終無所成，故求爲居巢長，欲假塗東歸，術聽之。遂自居巢還呉。是歲，建安三年也。

とある。

たことと、根拠地をどんどん食いつぶして移動し、衰退していったことにある。生前の孫堅は「漢室匡輔」を掲げていたが、目に見えてはっきりとわかる象徴的なものではなく、彼の正統性は漢王朝のために戦うという行動を示すことしかなかったのである。これが、孫堅が後継者にのこした“遺産”であった。このように見ると、孫策からしてみれば、漢王朝になりかわり皇帝を名乗った袁術と行動を共にするということは、父親からの“遺産”を潰すことになる。それ故に、孫策は袁術から離れていったと見られる。

この後、袁術の残党が曹操の旧友でもあった劉勲側と袁術勢力の“後継者”と見られていたとされる孫策側に割れるが、その後孫策は劉勲の勢力を滅ぼして江東六郡を制圧し、袁術・劉繇の「後継者」となった³⁴⁾。が、先にも述べたように、朱儁の一族は孫策が進出する以前の揚州や交州に力を伸ばしていたと見られることから、孫呉政権は朱氏の勢力も受け継いだものであったことが指摘できる。ということは、孫策・孫権の政権は、周瑜の協力を得ながら190年代に何かしらの形で揚州を支配していた勢力を総合した後継政権だったのである。

しかし、その後、孫策が26歳で暗殺されてしまう。後を継いだ孫権を周瑜は支えていった。孫権は後を継いだ時に20歳にならないくらいの若さであり、家柄も高くなかったため配下の中には孫権を主君として敬わない者もいた。そんな中で、後漢の名門出身の周瑜が率先して孫権に従ったため、孫権が君主でいることができ、孫氏政権の君臣関係も安定したのである（このような周瑜の存在の大きさが煙たかったためか、結果的に孫権は周瑜の一族を冷遇している）³⁵⁾。

歴史書『三国志』周瑜伝にわざわざ「姿貌有り」と書いてあるほど優れた容姿を持ち、「周郎」（「周の若殿」）とも呼ばれ、「曲を弾き間違えると、周郎が振り

34) 石井前掲論文、拙著127頁参照。ちなみに、後に孫権は袁術の娘を妻に迎えているが、これは孫氏政権が袁術勢力の後継者としての側面を持つことを示している。

35) 「周瑜伝」参照。周瑜の子・周循は早世し、弟の周胤は罪に問われて廬陵郡に遷され、諸葛瑾や步騭が上疏し、朱然・全琮の口添えでようやく許されそうになったところで病死した。

返る」といわれるような音楽の才能もあったとされる³⁶⁾上に人望もあり³⁷⁾、後漢時代の名門として家柄も申し分なく、赤壁の戦いを勝利に導いた司令官としての力量³⁸⁾も「天下二分の計」³⁹⁾をめぐらすなど戦略家としての力量も並ではない。ここまで述べたことが一身に兼ね備えられているのである。魅力的でないわけがない。

それに、歴史書『三国志』を見ると、孫氏政権が統一を目指して本格的に動いたのは周瑜の時代が最後と言っても良いほどである。「自分の後を（「天下三分の計」を考えていた）魯肅に」という遺言を残した⁴⁰⁾ということは、「天下二分の

36) 「周瑜伝」には

瑜長壯有姿貌。……吳中皆呼爲周郎。……瑜少精意於音樂，雖三爵之後，其有闕誤，瑜必知之，知之必顧，故時人謠曰：「曲有誤，周郎顧。」

とある。

37) 「周瑜伝」には

性度恢廓，大率爲得人，惟與程普不睦。

とあり、程普とは仲が良くなかったとされるが、「周瑜伝」裴注所引『江表伝』では

普頗以年長，數陵侮瑜。瑜折節容下，終不與校。普後自敬服而親重之，乃告人曰：「與周公瑾交，若飲醇醪，不覺自醉。」時人以其謙讓服人如此。

とされる。

38) ただし、これについては「『三国志』呉書とその裴注によれば」という条件がつく。拙著『三国志 赤壁伝説』（白帝社 2009年）参照。

39) 「天下二分の計」については、「周瑜伝」に

是時劉璋爲益州牧，外有張魯寇侵，瑜乃詣京見權曰：「今曹操新折衄，方憂在腹心，未能與將軍連兵相事也。乞與奮威俱進取蜀，得蜀而并張魯，因留奮威固守其地，好與馬超結援。瑜還與將軍據襄陽以蹙操，北方可圖也。」

とあるように、長江上流の益州を攻略して劉璋と張魯を併合し、その益州を孫権に統治させて涼州の馬超と同盟を結び、その後で周瑜は蜀から戻って長江中流の荊州・襄陽から北上して孫権とともに曹操を撃つという戦略のことである。

40) 「魯肅伝」に

周瑜病困，上疏曰：「當今天下，方有事役，是瑜乃心夙夜所憂，願至尊先慮未然，然後康樂。今既與曹操爲敵，劉備近在公安，邊境密邇，百姓未附，宜得良將以鎮撫之。魯肅智略足任，乞以代瑜。瑜隕陪之日，所懷盡矣。」

とある。

(44)

計」を実行できるのが自分しかおらず、後は魯肅が担う「天下三分の計」⁴¹⁾でいくしかないと考えたということだろう。それだけの能力と魅力を持った周瑜を若くして失ったことは、孫権にとって、また孫呉政権にとって取り返しのつかないダメージとなってしまったのである。

おわりに

孫策と周瑜の友情は、決して個人的なものではなく、軍事力を背景にのし上がってこうとする地方豪族の孫堅と三公を輩出するような周氏との提携であった。この兩者をつなぐ人物の一人が朱儁であったと見られる。朱儁は自身も貧しい中から功績を挙げて出世し、黄巾の乱を孫堅とともに戦い、その実力を知る人物であり、のちに朱儁と周忠が手を携えて董卓軍の李傕と戦い敗れていることから周氏ともつながりがあったことが推測できる。

孫堅が「漢室匡輔」の建前のもと、長沙から北上して反董卓同盟軍に加わる際に、事実上袁術の配下となっているが、この関係を後押ししたのが汝南袁氏と関係が深い周氏や朱儁であったと想定できる。廬江周氏の基礎を築いたとされる周榮は袁紹・袁術の汝南袁氏の祖である袁安の故吏であり、密接な関係があったことが考えられる。また、朱儁は汝南袁氏の袁遺や袁忠、そして袁術自身とも関係があったことがわかっている。

このようなことを踏まえると、孫堅・孫策と廬江周氏の関係はこの兩者の間だけで始まったものではなく、後漢の中央政界や揚州出身の有力者を巻き込んだものであった。

ただし、その中で中央政界との関係が密ではない地方豪族である孫堅が周氏や朱儁・袁術と関係を持つことができた要因は、彼の軍事の実績であった。そ

41) 「魯肅伝」に

肅對曰：「……肅竊料之，漢室不可復興，曹操不可卒除。爲將軍計，惟有鼎足江東，以觀天下之釁。規模如此，亦自無嫌。何者？北方誠多務也。因其多務，剿除黃祖，進伐劉表，竟長江所極，據而有之，然後建號帝王以圖天下，此高帝之業也。」

とある。

れ故、孫堅が戦死すると、孫堅の軍団は解体し、実績がなかった孫策も周瑜のもとを離れ、江都・曲阿へと移っている。少なくとも孫堅の死去直後の孫策と周瑜の関係は、その行動から見ると決して「断金」とまでは言えないものであった。

袁術の配下として、孫策は江淮・江東を攻略するが、江東進撃の際に周瑜と行動をともにしている。しかし、周瑜は（その行動を見ると）丹楊を鎮めてほしいという孫策の依頼よりも袁術からの指示を優先し、袁術の配下として動いているように見える。

それが変化するのは、197年に袁術が皇帝を名乗り、「漢室匡輔」を目指す孫策や周瑜の方向性と相いれなくなったため、二人が協力して行動することになる。その後、孫策は周瑜の協力を得ながら190年代に揚州を支配していた袁術・劉繇、そして朱氏の勢力の「後継者」としての地位を手に入れ、政権確立を目指していくことになった。

孫策が暗殺された後、周瑜は孫権を支えていった。孫権の若さと、高くなかった家柄から、配下の中には孫権を主君として敬わない者もいたが、後漢の名門出身の周瑜が率先して孫権に従ったため、孫氏政権の君臣関係も安定したと見られるほど、周瑜の存在は大きなものだったのである。

司令官・戦略家としての力量、音楽の才能、人望、容姿などの能力・魅力に満ちあふれ、「天下二分の計」を掲げて孫氏政権で統一に挑もうとしたほぼ唯一の人物を失ったことは孫氏政権の未来に暗い影を落とすほどであったのである。

(みつだ たかし・委嘱研究員)

A Historical Background of the “Devoted Friendship” in *Sun Ce* and *Zhou Yu* – the *Sun* Family, the *Zhou* Family, the *Yuan* Family, and the *Zhu* Family

Takashi MITSUDA

The beginning of the close relationship between the *Sun* (孫) family and the *Zhou* (周) family was not just among them but involved the influential people in the national politics of the *later Han* (後漢) and in Yan Zhou (揚州). It is conceivable that *Zhu Jun* (朱儁) was the mediator between *Sun Jian* (孫堅) and the *Zhous* because of his close relationship with *Sun Jian* and the *Zhous*.

In addition, the *Zhous* had been closely related the *Yuan* (袁) family in Ru’nan (汝南) for four generations from *Zhou Yu* (周瑜). *Zhu Jun* was also in close contact with the *Yuan*s. From the above, it can be supposed that the reason for *Sun Jian* to become *Yuan Shu* (袁術)’s subordinate was due to the relationship between the *Suns*, the *Zhous*, the *Yuan*s, and the *Zhu* (朱) family.

However, the factor of their relationship was from the military achievements of the *Suns*. That is why *Zhou Yu* gave more priority to *Yuan Shu*’s command than to *Sun Ce*’s request.

When *Yuan Shu* called himself emperor, *Sun Ce* and *Zhou Yu* became independent from *Yuan Shu*. *Sun Ce* and *Sun Quan* (孫權) got the position of “successors” of *Yuan Shu*, *Liu Yao* (劉繇), and the *Zhus*, who swayed Yan Zhou in the 190s, and established the *Sun* government in collaboration with *Zhou Yu*.